

人生満足度評定とアイテム・オーダー効果の文化差

佐伯政男^a, 大石繁宏^b, Minha Lee^c, 前野隆司^d

要旨

人生満足度評定におけるアイテム・オーダー効果について調査するため2つの実験を行った。実験1では被験者を人生全般の満足度の前にさまざまな人生領域の満足度を回答する条件と人生全般の満足度の後にそれらの質問群に回答する条件のいずれかに割り当てた。アメリカ人の被験者は日本人に比べて最もうまくいっている領域を重視して人生満足度を評定した。特に、人生満足度判断の前に人生領域の満足度に回答した時、その傾向は顕著であった。日本人の被験者は全般的にアメリカ人の被験者に比べて、うまくいっていない人生領域を重視して人生満足度を評定した。日本人のこの人生満足度評定のパターンは日本人が常時他者の考えを注視しているためかもしれない。そこで、実験2ではこの仮説を試験した。予想通り、他人から見られていなかった経験を喚起された被験者は、実験1のアメリカ人と同様にうまくいっている人生領域を重視して人生満足度を評定した。

キーワード：質問順序，人生満足度評定，文化，社会的判断

JEL Classification Numbers: C90, I31

1. 背景

友人関係や学業，恋愛関係といった様々な人生領域の満足度は人生全般の満足度の構成要素であるため，主観的幸福感調査において広く用いられている。そのため，これら人生満足度に関連する様々な情報が顕著であるとき，すなわち，これらの質問が先行する質問であったとき，あとに続く人生満足度評定にどのような影響を及ぼすか知ることは意義がある。東アジアの人々はアメリカ人に比べてポジティブとネガティブ両面を考慮するのに対して，アメリカ人ではポジティブな側面に焦点を当てる（cf. Oishi, 2002）。そのため，人生満足度評定の前に様々な人生領域について考えさせられた場合，アメリカ人は最も満足している領域を重視する一方，日本人は最も満足していない領域についても考慮して全般的な人生満足度を評定することが予想される。実験1ではこの仮説を検証した。実験2では日本人はなぜアメリカ人よりもうまくいっている側面を軽視して人生満足度評定を行うのかその理由について探索した。

2. 実験1 アイテム・オーダー効果の文化差

2.1 方法

被験者は83名の日本人の大学生（男性52名，女性30名，不明1名）と112名のアメリカ人の大学生（男性90名，女性22名）である。平均年齢はそれぞれ22.52歳（SD = 1.62），18.47歳（SD = 0.95）であった。調査項目はDiener et al.(1985)の the Satisfaction With Life Scale (SWLS: 5項目7件法)と9つの人生領域の満足度（各領域について2項目7件法）である。被験者は Specific-global 群（人生領域満足度の質問群に回答した後，SWLSの質問に回答する群）と Global-specific 群（先にSWLSの質問に回答後，人生領域の質問に回答する群）に無作為に割り当てられた。

2.2 結果及び考察

Best domain（被験者ごとに算出した最も満足している人生領域の満足度），Worst domain（最も満足していない人生領域の満足度），Culture（-1 = アメリカ，1 = 日本），Item-order（-1 = Global-specific，1 = Specific-global）及び交互作用項を独立変数，人生満足度を従属変数とした重回帰分析の結果，Best domain × Item-order × Culture の3要因の交互作用が有意となった（ $\beta = -.19, p < .01$ ）。そこで，それぞれの国について別々に重回帰分析を行ったところ，アメリカ人では Best domain と Item-order の交互作用がみられた（ $\beta = .16, p = .02$ ）。一方，日本人の被験者ではその交互作用は見られなかった。つまり，アメリカ人は様々な領域について人生満足度評定の前に回答した場合，先に人生満足度評定を行った場合に比べてポジティブな領域を重視した。一方，日本人は，質問順序の違いに関わらず，ポジティブな面とネガティブな側面の両者を考慮して人生満足度を判断した。

3. 実験2 他者の目

なぜ日本人はアメリカ人よりも正負両面に焦点を当て人生満足度を評定するのか。これは日本人がアメリカ人よりも常時他者の考えを気にかけているためかもしれない (Imada & Kitayama, 2010; Markus & Kitayama, 1991, 2003; Na & Kitayama, 2012)。そこで実験2では，他者の存在による影響を実験的に取り除くため，他人から意外と見られていなかったと感じた過去の経験について思い返し報告する条件を設けてアイテム・オーダー実験を行った。もし他人の存在が原因であれば，他人が自分を見ていないという経験を報告したグループは，他人から見られていた経験を報告した群に比べて，実験1のアメリカ人の被験者が示したようなネガティブな側面を軽視しポジティブな側面に焦点をあてる自己高揚を人生満足度評定において示すことが期待される。

3.1 方法

被験者は 400 名の日本人の大学生（男性 211 名，女性 189 名）である。平均年齢は 22.29 歳（SD = 2.28）であった。実験計画は 2（他人から見られていた経験を報告 vs. 他人から見られていなかった経験を報告）× 2（General-first vs. Specific-first）を用いた。

3.2 結果及び考察

人生満足度を従属変数とした重回帰分析の結果，Best domain×Item-order×他者の目（-1 = 見ている，1 = 見ていない）の 3 要因の交互作用が有意となった（ $\beta = .07, p = .09$ ）。そこで，2 つの他者の目条件を別々に分析した。他人から見られていない経験を報告した群では，Best domain と Item-order の交互作用が有意であった（ $\beta = .16, p < .01$ ）。つまり，他人から見られていないと信じた群では，実験 1 のアメリカ人と同様に，先に人生全般の満足度を回答した時に比べて人生の様々な領域が顕著であるとき，うまくいっている人生領域を重視して人生満足度を評定した。一方，他人から見られていた経験を報告した群では，Best domain と Item-order の交互作用は有意ではなかった。つまり，この条件では実験 1 の日本人と同様，質問順序の違いによる影響はなかった。この結果から予想通り，実験 1 の日本人において見られた正負両面を重視する人生満足度評定は常時他者の考えを気にしている結果であることが示唆された。

引用文献

- Imada, T., & Kitayama, S. (2010). Social eyes and choice justification: Culture and dissonance revisited. *Social Cognition*, 28, 589-608.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (2003). Culture, self, and the reality of the social. *Psychological Inquiry*, 14, 277-283.
- Na, J., & Kitayama, S. (2012). Will people work hard on a task they choose? Social-eyes priming in different cultural contexts. *Journal of Experimental Social Psychology*, 48, 284-290.
- Oishi, S. (2002). The experiencing and remembering of well-being: A cross-cultural analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28(10), 1398-1406.